

4 技能の統合的な活用を目指す授業づくり

— Dictogloss を用いた実践を通して —

高野 真依¹

新学習指導要領では4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することが求められている。そのためには授業の中で生徒が英語を使う場を設定し、生徒自身の主体的な自己表現活動を促すことが必要であると考えた。本研究ではその手法として、リスニング、ピア・ラーニング、アウトプットを含むDictoglossを用いて、生徒主体のコミュニケーション的な授業展開の中で文法指導と言語活動を一体的に行い、その成果を検証した。

はじめに

平成20年1月、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申（以下 答申）を示した。その中で、基本方針として「『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』及び『書くこと』の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る」ことが記載されている。ここで示している「総合的」とは「バランスよく」という意味であり、「統合的」とは「二つ以上の技能を結び付けて」ということである（向後 2011）。

平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領（以下 新学習指導要領）では外国語科の目標を「コミュニケーション能力を養う」とし、このコミュニケーション能力の中核をなすものとして、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」（p. 110）能力を育成することが新たに加えられた。また、英語に関する各科目に共通する内容等の中で「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」（p. 115-116）と記されている。

これまでの自身の実践を振り返ると、生徒に英語を好きになってもらいたい、生徒の英語力を高めたいという気持ちは持ちつつも、言語活動の中の技能の統合についてはあまり意識してこなかった。文法指導も単独で行い、言語活動との一体化を図ることは少なかったと思う。また、授業を英語だけで行うことは生徒にとって本文内容把握や文法項目の定着が難しくなるだろうとの判断から、試みることはなかった。

しかし、答申や新学習指導要領の内容を受け、生徒の英語力を高めるためには、自身の従来の授業を改善する必要があると感じた。そこで、本研究では文法指導と言語活動を一体的に行うことができるDictoglossを手法として用い、英語だけで行う生徒主体のコミュニケーション的な授業展開の中で、4技能を統合的に活用させる授業づくりに取り組み、生徒が学習した文法を使いながら、考えや意見を生徒自身の英語で表現することを目指した。

研究の内容

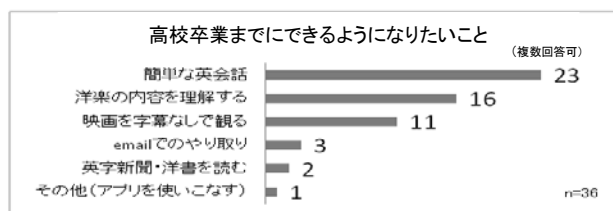
1 研究の背景

(1) 第二言語習得理論

第二言語習得理論とは、学習者が母語ではない言語を学ぶ過程を科学的に解明する学問である。M. Swain (2000) はアウトプット仮説 (the Output Hypothesis) を提唱し、第二言語習得のためには、まず、十分なインプットを受け、学習者がその言語を使って話したり、書いたりして産み出すアウトプットが必要不可欠であると主張している。

しかし、日常生活の中で生徒が英語を使用する機会はかなり限られており、インプット、アウトプット共にその量は非常に少なくなっている。生徒が英語で何かを伝えたいという気持ちを持ちにくいことや英語を話す必要がないと思ってしまうこと背景には、このような現状があると考えられる。

(2) 生徒の実態



第1図 事前調査

対象クラス36名に対して7月に実施した事前調査「英語学習に関するアンケート」で、「高校卒業まで

1 神奈川県立新栄高等学校
研究分野（授業改善研究 外国語（英語））

にできるようになりたいことは何か(複数回答可)」の問いに23名の生徒が「簡単な英会話ができるようになりたい」と回答している(第1図)。しかし、その23名のうちの16名が英語を学ぶことが「嫌い」、「どちらかというと嫌い」と答えていることが分かった。その16名を含むクラスの6割の生徒が「難しい」、「単語や文法が分からない」、「苦手である」という理由から、英語を学ぶことに関して、消極的な意見を持っていた。

この調査により、生徒は将来的には「英語を話せるようになりたい」という希望を持っているものの英語学習に対して苦手意識を持っていることが分かった。このような生徒の実態を踏まえ、文法学習と言語活動を結び付けながら、生徒の英語力を高める必要があると考えた。

以上を踏まえ、本研究では、生徒の英語力を高める授業づくりの視点として、まず、「英語で授業」を行うことでインプットの機会を増やすことにした。さらに、Dictoglossを用いて、4技能を統合的に使うアウトプットの間を設けて、文法指導と言語活動を一体的に行うこととした。

2 Dictoglossとは

(1) Dictoglossの定義と目的

Dictogloss はR. Wajnryb (1990) によって提唱された文章復元法と言われる言語指導法であり、以下のよう

- | |
|---|
| <p>a. 短く、内容の濃い(理解に集中力を要する)文がノーマルスピードで(2回)読まれる。</p> <p>b. 文が読まれている間、学習者は理解できた語句をメモする。</p> <p>c. 学習者は少人数のグループで各々の断片的なメモや記憶を基に、情報や知識を共有し、文を復元する。</p> <p>d. それぞれのグループは原文を正確に復元するのではなく、グループ内の知識を基に文を復元する。その際、文法の正確さや話の首尾一貫性が重視される。</p> <p>e. 学習者は原文と復元した文の分析・比較を行い、復元した文の訂正・加筆をする。</p> |
|---|

Dictoglossはリスニング、ピア・ラーニング、ライティング、プレゼンテーション&分析の四つの活動から成り立っている。ピア・ラーニングのピアとは「仲間」の意味で、今回の研究実践ではグループで行う活動のことを指している。この活動手順を図示すると第2図のようになる。これを見ると、Dictoglossは「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能の統合を図ることができる活動であると分かる。

また、WajnrybはDictoglossの目的として、

- ・文章復元のタスクの中で、文法を学習者に意識させながら、アウトプットの機会を学習者に与える。
- ・原文を復元する過程やその後の分析を通して、学習



第2図 Dictoglossの定義と活動の統合

者にその言語について何を知っていて、何を知らないのかを気付かせる。

- ・学習者自身が訂正する過程の中で言語選択の総合的な分析をし、言語使用能力を向上させる。
- ということを挙げている。

つまり、Dictoglossとは、「できる・できない」ことを自覚させ、その言語に対する意識を高めさせる活動であると言える。また、村野井(2006)もDictoglossについて「学習者に自分の表現能力の限界を気付かせる上で有効なアウトプット活動である」と述べている。

(2) 先行研究の概要

今井(2005)は中学生を対象とした研究実践を行い、タスク活動後にDictoglossを連動させることで、目標文法項目の理解が促進され、定着することを実証した。さらに、Dictoglossの前にDrillやExerciseのような言語形式の獲得に重点を置いた活動を行った上で、流暢さを高めるタスクを行うことが大切であることも示唆している。

岩本(2013)は一単元の指導計画の中にある「文法問題演習、英作文練習」の時間において、Dictoglossが英語の基礎学力の定着に与える影響について検証した。その中で、「Dictoglossを他の活動と組み合わせて実施することで、英語の基礎学力の定着により影響を与える可能性がある」と述べている。

前田(2012)は日本英語検定協会が作成した『Step-up Listening』を教材として、リスニング能力を伸ばすことを目的にDictoglossを用いた。その結果、リスニング能力だけではなく、ライティング能力も伸ばせると分析した。

これらの先行研究から、Dictoglossをタスクなどの他の活動と組み合わせて行うことが、特定の文法項目の理解や基礎学力の定着につながる可能性があること、さらに、生徒のライティング能力の伸長に関係することが予測できた。

3 研究の手立て

(1) 所属校におけるDictogloss手順の工夫

今回の研究では、Dictoglossを特別な活動としてではなく、日常的な学習活動として取り入れたいと考えた。そこで、*Grammar Dictation* (Wajnryb 1990) に書かれている手順を参考に、所属校の生徒の実態に合わせ、次のような指導手順を考えた(< >内は指導上の留意点)。具体的には、教科書の本文内容と目標文

法項目を別々の時間に教えるのではなく、それらの活動を同時に行いながら、2時間で1Partを指導する授業展開を計画した。まず、インプットとして、生徒に本文内容理解と目標文法項目の学習に取り組み、その学習した内容をDictoglossを用いてアウトプットさせることとした。

Dictoglossの手順

① リスニング

3回、英文が読まれるのを聞く。1回目は聞くことに集中し、2回目と3回目は読まれる英文の中から重要だと思う語句をワークシートのNote-taking(メモ)の欄に書く。<ノーマルスピードで読み、ポーズを入れないものとする。>

② ピア・ラーニング&ライティング

Note-taking欄に書いた語句を基にグループで話し合い、Reconstruction(復元)の欄に文を復元する。<英語が苦手な生徒が多いので、話し合いは日本語で行わせた。時間は10分。>

③ プレゼンテーション

グループで復元した文を発表する。<事前に重要な語句をカードに書き、準備した。生徒が発表した中にそれらの語句が含まれていれば、黒板に貼り、クラス全体で共有させた。>

④ 訂正・分析

原文と復元した文を比べ、訂正する。その後、Analysis and Notice(分析と気付き)の欄で振り返る。

7月に行ったPre-testの結果を参考に学級担任や教科担当と話し合い、英語が苦手な生徒ばかりが集まらないように配慮しながら、Dictogloss活動のためのグループ分け(4人1組)を行った。

(2)Dictogloss 教材の作成

The Dutch are always looking for ways to live in harmony with water, such as building floating houses. When the water level goes up, the houses also float up. **Their way of life tells us that we can find ways to enjoy living under difficult conditions.**

第3図 Lesson7-4 Dictogloss 教材

Dictoglossが教科書を使用する通常の授業でいかされるように、各Partの本文内容と目標文法項目を復習させるための教材(第3図)を作成し、これを用いて、文法指導と言語活動を一体的に行った。太字で示した文は目標文法項目である「S+V+O1+O2(=that節)」を含む文である。

作成に当たり、各PartのDictogloss教材が本文内容事項三つと目標文法項目を含むこと、そして、3文で成り立ち、合計語数に大きな違いがないように留意した。また、教科書本文と全く同じ文を使用しないことや、あまり簡単になりすぎないように単語や表現を言い換えることなどについても工夫した。

(3)授業全体の工夫

ア ICTを活用した「英語で授業」

英語によるインプットの機会をできるだけ多く生徒

に与えるために、授業は全て英語で行った。生徒が英語による教師の指示や説明を聞いて理解し、言語活動に取り組むことで、教室を実践的なコミュニケーションの場とすることができると考えたからである。その際、一方的に生徒に話すのではなく、生徒の状況をよく観察し、理解できていない様子が見られたときは、簡単な表現を用い、「You can do it.」など状況に応じた言葉掛けを行った。

しかし、事前調査において6割の生徒が英語を学ぶことが「嫌い」、「どちらかといえば嫌い」と答えたことを踏まえ、英語だけで展開される授業に対する抵抗感を減ずるためにICTを活用した。授業全般を通してプレゼンテーションソフトを使用し、その場面の活動内容が分かるスライドを常に提示した。

イ ワークシートの工夫

検証授業に当たり、3種類のワークシートを作成した。1点目は、語彙のワークシートである。発表語彙(自己表現活動で使わせたい語彙)と、受容語彙(意味だけ理解できればよいと判断した語彙)の区別を明確にし、生徒が学習しやすいようにした。ここでの発表語彙はDictoglossで生徒が使うものとした。2点目は、本文内容理解と目標文法項目のワークシートである。目標文法項目に関しては、問題演習や英作文などで繰り返し触れることで定着させる工夫をした。3点目は、Dictoglossのワークシートである。英語が苦手な生徒をサポートするため、Dictoglossの活動における手順や指示をワークシート内に日本語で示した。

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

科目名	コミュニケーション英語 I
使用教科書	Grove English Communication I (文英堂)
単元名	LESSON 7 The Netherlands - Living with Water

単元目標

- 行きたい国についての自分の考えをまとめ、文を書き、話すことができる。
- 自分の考えや気持ちを伝えたいという自己表現活動に興味を持つ。
- 英語を聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる

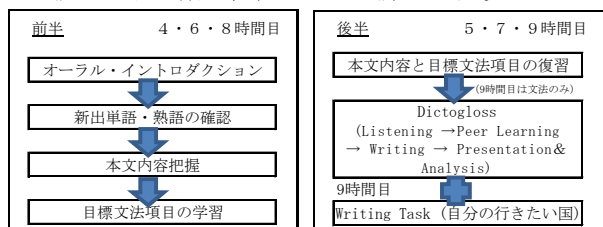
(2) 検証授業の流れ

Lesson 7を全10時間で指導する計画を立てた。まず、1時間目に準備段階として単元の概要把握を行った。2~9時間目で四つのPartについてDictoglossを用い、本文の内容理解と目標文法項目の学習を行った。9時間目の最後には、まとめの自由英作文をライティング・タスクとして実施し、10時間目にそれを発表し、共有させることとした。検証授業は、以上のうちPart 2

からPart 4 までとライティング・タスクの部分で行った。

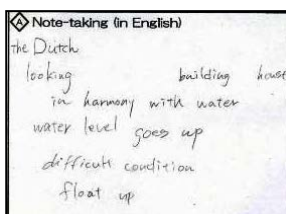
ア Dictoglossの活用

各Partとも2時間を1セットとして実施した。大きく分けて、前半（1時間目）はDictoglossに取り組む前の情報と言語知識のインプットの段階、後半（2時間目）は実際にDictoglossを行い、自らの力を確認し、自己評価を行う段階と位置付けた（第4図）。

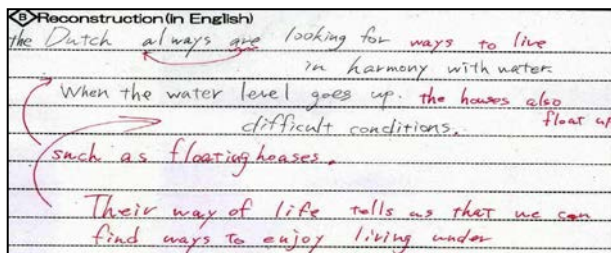


第4図 検証授業の流れ

具体的には、前半ではまず、語彙のワークシートを使用し、ペアワークで新出単語・熟語の確認を行わせた。次に、本文内容理解と目標文法項目のワークシートを使い、内容についてのYes / No questionを解かせた。「No」の問題については、本文と異なる箇所を必ず確認し、正しく直せるまで考えさせた。その後、文法項目を導入し、例文の確認をさせた。



第5図 Note-taking欄 第6図 ピア・ラーニング



第7図 Reconstruction欄

後半では、それぞれの前時にインプットした本文内容と目標文法項目の復習をさせ、学習したことをアウトプットさせるためにDictoglossを行った。生徒には読まれる英語を聞きながら、「Note-taking」の欄に重要だと思ふ語句を書き留めさせた。第5図はその一例である。それを基に聞き取れた単語や内容はどのようなものだったかをグループで話し合い（第6図）、協力して「Reconstruction」欄に文を復元させた。その後、クラスで発表し、全体で共有させた。最後に、原文と評価スケールを示したハンドアウトを見ながら、間違えた箇所や復元できなかった内容等を色ペンで訂正・加筆し（第7図）、自己評価をさせた。

イ ライティング・タスクの実施

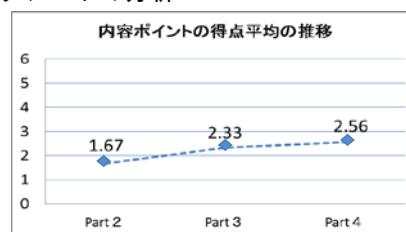
四つのPartの学習の後にライティング・タスクとして、「自分の行きたい国」という題で自由英作文を書かせた。Dictoglossを用いた授業だけでは生徒の書く力を測ることが難しいと考えたからである。また、アウトプットすることが「頭の中では分かっている英語に関する知識を実際の運用の中で使える知識に変えてくれる」（伊東 2008）ということ踏まえて、自由英作文という言語使用の場を設定することにより、目標文法項目の定着を図ることを目指した。

具体的には、作文をさせる前に、マインド・マッピングで生徒自身の考えを整理させてから、取り組ませた。その際、それぞれのLessonにおいて学習した目標文法項目を三つ挙げ、少なくともどれか一つを使うように指示し、制限時間を10分とした。

5 検証結果と考察

(1) Dictoglossの活用について

ア ワークシートの分析



第8図 Dictogloss 内容ポイントの推移

ここではDictoglossの復元文を用いて、「内容の再生（復元）度」と「文の正確さ」について検証する。第8図は「内容の再生度」を示す内容ポイントの推移である。内容ポイントとはDictogloss教材に含まれる各Partの内容三つを点数化したもので、それぞれ2点とし、合計6点とした。また、内容が全て書いていなくてもキーワードが書いていた場合には中間点の1点を与えた。この結果から、Dictoglossの回数を重ねるごとに少しずつではあるが、再生されるべき内容ポイントの数値が上がっていることが分かる。

第1表 各Partにおける文の正確さの割合

	Part 2	Part 3	Part 4
文の正確さ	20.4	23.2	5.6

第1表は各Partにおける「文の正確さ」の割合である。「文の正確さ」とは各グループの再生文における文法的な誤りのない文の割合であり、表中の数値は全グループの平均値である。この表からPart 4の数値がかなり低くなっていることが分かる。原因として、Part 4の文法項目「S + V + O₁ + O₂ (=that節)」の文に主語と動詞が二つずつ含まれており、生徒にとって理解が難しかったことが考えられる。

やはり、短期間の取組のため、生徒がDictoglossの活動そのものに習熟しておらず、内容と言語形式の両方に注意を向けることが難しかったのではないかと推

察される。

イ Pre-test&Post-testの分析

Dictogloss が文法知識の習得に与える影響を検証するために、英検 3 級の問題を基に検証授業前の 7 月に Pre-test、検証授業後の 11 月に Post-test を行った。この test での問題数は全 15 問である。対象生徒は 36 名であったが、Post-test を受けていない生徒 2 名を除く 34 名のデータを分析した (第 9 図)。

	平均正答数	最多正答数	最小正答数
Pre-test (7月16日実施)	7.97	13	4
Post-test (11月26日実施)	7.47	13	1

Part2 目標文法項目 34名中26名(約76%)が正答

第 9 図 Pre-test&Post-test 結果

平均正答数を比較すると、Post-testにおいてやや下がっている。しかし、Post-test中の、Part 2 の目標文法項目「It is + ~ (for ...) +to不定詞」に関わる問題について見てみると、約76%の生徒が正答している。これは全15問で最も高い正答率であった。

今回の結果から、短期間であっても、特定の言語形式に対する意識付けにはある程度の効果があると分析した。より多くの文法項目に注意を向け、自分の文法知識を再構築させるには、Dictoglossの継続的な実施が必要だと考える。

ウ ライティング・タスクの分析

生徒の書く力を測るために、本単元の 9 時間目にライティング・タスクとして自由英作文を書かせたが、比較材料として検証授業前の Lesson 6 でも同様の作文を書かせた。Lesson 6 はテーマを「好きな有名人」とした。どちらも持っている知識を使い、自分の興味・関心について書くという意味で、等価のタスクであると判断した。

ここでは生徒の書く力の「流暢さ」と「正確さ」を検証するため、二つの英作文を「語数」、「目標文法項目の使用率」、「正確な文の割合」という三つの観点に基づいて分析する。これは、「流暢さについては、概念自体が広いうえ、言語能力に関する様々な要素を含みうるという点を考慮し、流暢さに関わる要素の『何』を測るかによって測定方法を使い分ける必要がある」

(桜木 2011) という考え方を踏まえ、ライティング・タスクにおけるの語数を「流暢さ」と考えたからである。また、「目標文法項目の使用率」と「正確な文の割合」を「正確さ」と定義した。

第 2 表は、比較可能な 34 名 (Lesson 7 のライティング・タスクを受けていない 2 名を除く) の英作文を「語数」、「目標文法項目の使用率」、「正確な文の割合」の三つの観点で測ったそれぞれの Lesson のクラス平均値である。各観点についての詳細は次のとおりである。

① 語数

自己表現活動に対する生徒の積極性を重視し、スピーキングが誤っているものも含めて、書かれている全ての英単語を数えた。

② 目標文法項目の使用率

時制や人称などと合わせて、目標文法項目が適切に使われている文の数を数えた。それぞれのタスクにおける同じ文法項目の重複を除き、異なる文法項目が使用されている文のみとした。全員の生徒が少なくともどれか一つの文法項目を使えていれば、第 2 表の数字は「1」となる。

③ 正確な文の割合

生徒の書いた全ての文における文法的な誤りのない文の割合を算出した。

第 2 表 ライティング・タスクの分析

	語数	文法使用率	正確な文の割合
Lesson 6	18.03	0.235	37.5
Lesson 7	26.24	0.559	51.7

第 2 表のとおり、全ての観点で明らかな数値の増加や上昇が見られた。特に語数の増加については、*t*検定により、統計的に有意な伸びであることが認められた。

これらの分析から、ライティング・タスクにおける語数の増加は、生徒の書く力における流暢さの向上を表しており、文法使用の値の上昇や正確な文の割合の増加は正確さの向上を示していると考えられる。Dictoglossを用いて 4 技能を統合的に活用させる授業を行ったことにより、英作文に対する生徒の抵抗感が少なくなり、自己表現活動への積極性が向上したと同時に、文法への意識もある程度高まったと言えるのではないかと分析する。

(2) 授業全体に工夫について

ア ICTを活用した「英語で授業」について

検証授業前は生徒が英語の指示や説明だけで本当に理解できるだろうかと不安であったが、生徒は次第に英語だけで行われる授業に慣れ、授業の形式を肯定的に捉えるようになった。事後調査でも「頑張って覚えようと思った」、「英語を理解できるようになりたい」、「分からない部分もあったけれど、大切な点は分かった」などの生徒の感想が見られた。特に、ICTを活用した授業については、多くの生徒が「授業がスムーズ」、「図などがあったので分かりやすい」と肯定的な感想を記述しており、生徒の理解を助ける有効な方法であったと考える。

イ ワークシートの工夫について

約64%の生徒はワークシートについて肯定的な意見を書いており、「単語を覚えやすくなった」、「本文の内容が楽しく理解できて良い」、「文法も分かりやすく感じた」といった意見が見られた。また、先述のPre-test&Post-testの結果からも単元の学習に関する文法の力が向上していることが分かった。このことから、

ワークシートにより情報を整理して提示したり、活動の内容や手順を示したり、また、タスクに対する親しみを持たせたりすることで、単語や文法及び内容の理解が深まったと言える。生徒に身に付けさせたい力を意識してワークシートを工夫することの大切さを確認できた。

6 研究のまとめ

(1) 研究の成果

学習指導要領の改訂に伴う新たな授業づくりにおいて、4技能を統合的に指導するDictoglossを用いた実践の有効性を検証した。その結果、目標文法項目に一定の定着が見られ、ライティング・タスクでは流暢さと正確さにある程度の向上が見られた。これらの検証結果はDictoglossに関する先行研究から得られた当初の予測とほぼ一致するものであった。

やはり、インプットの量を増やし、生徒にアウトプットさせることで英語使用の機会が増えたことが、このような成果の一番の要因だと考える。そして、Dictoglossによって自分が理解できていること、できていないことに気付く機会を与えたことも、生徒の文法に対する意識の高まりや書くことへの意欲向上において有効であった可能性が高いと分析する。

また、ICTを活用し、ワークシートを工夫しながら英語で授業を行えば、本文内容・文法項目の理解、自己表現活動に意欲的に取り組ませることができると分かった。特に、英語による授業の中で、重要な部分を意欲的に集中して聞く生徒の姿が見られたことも大きな成果であった。

(2) 今後の課題

当初はDictoglossの活動を繰り返すことで、リスニングやライティングの能力が向上し、復元された英文の質も徐々に高まっていくだろうと予想していた。しかし、今回の検証授業でそのような結果を得ることはできなかった。その要因としてDictogloss活動の回数の少なさ、及び、ピア・ラーニングでのグループ内リーダーの有無によって、Dictogloss活動の質に差が生じたことが挙げられる。

今後は生徒の特性をいかし、グループ分けを行うとともに、Dictoglossを行う回数を増やすことが必要だと考える。また、Dictogloss教材を読む回数やスピードを変えたり、英語が得意な生徒にはピア・ラーニングを英語で行わせたりすることも可能であると考えられる。

おわりに

本研究でDictoglossを用いた授業改善に取り組み、感じたことはDictogloss活動自体に生徒の英語力を高めることができる「力」があるということである。回数を重ねていくことで、成果は上がるのではないかと

思う。また、教師の「これはできないだろう」などという思い込みで、生徒の限界を決めてはいけないということに改めて気付くことができた。生徒は教師が思っている以上に柔軟性があり、生徒の可能性を信じ、挑戦させることの大切さを感じた。

現在、日本の英語教育は変革の時を迎えている。英語教育が置かれている状況に常に向き合いながら、生徒にどのような力を身に付けさせたいかという明確な目標を立て、それを実現するためにはどのような方法がよいのかを探究することが、今、求められている。自身もDictoglossについての研究をさらに深め、教材研究、授業改善に取り組み、生徒の英語力だけでなく、英語学習に対する意欲も高めることのできる教師であり続けたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 p.110
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領』
- 伊東治己 2008 『アウトプット重視の英語授業』 教育出版 p.12
- 岩本藤男 2013 「中学校の英語授業でDictoglossが果たす役割」（『中部地区英語教育学会紀要』第42号）中部地区英語教育学会 p.166
- 桜木ともみ 2011 「『複雑さ・正確さ・流暢さ』指標の構成概念妥当性の検証：日本語学習者の発話分析の場合」（『JALT Journal, Vol. 33, No. 2』）全国語学教育学会 p.169
- 村野井仁 2006 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店 p.108
- Wajnryb, R. 1990 *Grammar Dictation*. Oxford: Oxford University Press. pp.5-19

参考文献

- 今井典子 2005 「中学校における正確さと流暢さを同時に高める言語活動の開発とその評価のあり方」（『STEP BULLETIN』第17回 英検研究助成報告書）日本英語検定協会 pp.133-151
- 向後秀明 2011 「4技能統合におけるスピーキング指導はどうあるべきか」（『英語教育』2011年7月号）大修館書店 pp.10-11
- 前田昌寛 2012 『高校英語「授業は英語で」はどこまで？—コミュニケーション能力を伸ばすためのマニュアル—』 北國新聞社
- Swain, M. 2000 The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In J. Lantolf (Ed.), *Sociocultural Theory and Second Language Learning*. Oxford: Oxford University Press. pp.97-114